

かかる超越性を有つところに意味の意味するところがある。然しかかる意味の意味性も、それが不変異にあるといわる限り、あるといい得る場がなければならない。然らずは不変異であるともいい得ぬのである。超越性は無関係ということではない筈である。勿論それを受ける場は対象的思维の意識ではない。触といい証というもやはり意識なのである。無分別の意識である。無の鏡である意識である。かかる無の鏡たる意識を場としてありのままは始めて用らくのである。

やはり意味の用らく場というものがなければ、超越的ともいうことは出来ぬのである。無の意識こそ、そのままそのままの意味を開示する場となるのである。存在にめざめた心は無の鏡となった心である。心は自らを空くすることによって存在をありのままに語らしめるということが出来る。存在にかえった心である法性心に心法性は自らを開示するのである。意識が自ら存在にかえれば、かえった自覚に存在の意味は用らくのである。用らくことによって意味は意味を失うのでなく、超越のままに実存にかかわるといふことが出来るであらう。

## 浄 土 真 宗

動乱の現世を超えて、静寂の浄土に向う。これを往相という。浄土のさとりを身につけて煩惱の人生に順応する。これを還相というのである。しかるに、その往還は、自力の歩行ではない。ひとえに如来の本願力に依るのである。即ち、本願力の廻向によりて、往還は、この身に成就するのである。したがって、往相には還相の復が具わり、還相を体として往相が現われるのである。しかれば、往還というも、ただ本願力を信証するの他ないであらう。それを指示するものは、**真実の教行**である。

これによりて、本願の教法を**浄土真宗と名ぶ**のである。

金子大栄著『口語訳教行信証』領解より